

2. 寄贈式の場所は、セブ市とビガン市

今回の寄贈は、筆者がセブ市とイロコス北州のビガン市に赴き、引渡式の準備と運営し、その前後に車椅子を使用する児童の自宅に訪問し、加えて、JVR 財団の傘下で車椅子の寄贈に関わった家電商品販売店のオートバイ修理技師と修理技術と補修部品の調達に関して打合せをしました。

セブ市：6月6日 マニラからセブ市に移動。引渡予定会場の設営、車椅子の状況点検・調整

7日 午前 Emcor 社セブ支店幹部への車椅子寄贈活動の概要と方針説明

午後 1時30分より車椅子引渡式運営

肢体障害児 17名、障害児家族 40名、福祉開発省職員 2名

8日 午前 Emcor 社セブ支店での朝会で職員に対して前日の車椅子寄贈の様子と目的などの説明と同社の今後の継続的支援を要請。

更に、同社のオートバイ修理部門の責任者と懇談し、寄贈済みの車椅子の修理を依頼し、また、工具などの調達の可否を確認

昨日車椅子を受け取った障害児の自宅に訪問し、車椅子の使用状況を確認し児童と家族との面談を期待したが、市内でなく郊外に住んでいるので、翌日にルソン島北端に行く日程の都合から訪問時間が取れないという理由から訪問出来ないことを知らされ納得せざるを得ませんでした。

マニラへの帰還は午後9時になりました。



障害児代表者の謝辞



寄贈された車椅子の1部



会場で聴衆の一部



翌日発刊の新聞報道の写し

ビガン市： 9日 午前 前日セブよりマニラに戻り、翌朝マニラからラオアグ市に空路移動
午後 陸路で2時間、午後4時過ぎにビガン市の Kservico 社に到着、寄贈対象の車椅子の所在確認。時間の不足で点検・調整は翌朝に。

10日 午前 午後から車椅子を宛がわれる予定の肢体不自由児の自宅を3軒訪問

し本人と両親に面談。途上の道路の閉鎖であると1軒の訪問が出来ず。午後 市内の集会場で引渡式を運営。その前に、車椅子の状況を点検し抜けていた空気を補充しました。

出席者は、肢体障害児 16名、その親族 10名、新任の州知事、福祉開発省職員 4名、NPO と 財団関係者 40名 合計70名。式の中での謝辞と発言で、去る2月のマニラで寄贈された車椅子からの1台を当地に転送され使用していた障害児とその母親により披露された経験談と謝辞は印象的でした。車椅子が本人と家族の生活に大きな変化と恩恵を与えているとの強調を受けて、「是非、今後も寄贈を繰り返して欲しい」とのシングソン知事からの要望を受けました。



肢体不自由児の生活する農村風景



引渡し会場で車椅子を受け取り乗っている肢体障害児と家族の様子

シングソン州知事

マニラ市：14日 午前 Kservico 本社での朝会での報告。在比日本大使館への表敬訪問。

NGO Norfil 社本部での幹部との将来的課題について意見交換。

午後 当地での中古車椅子の清掃整備作業を開始するための候補地視察。

JVR 財団の系列会社の工場の遊休土地であり、マニラ空港に比較的近い郊外で交通の便と人集めの容易さに優位性のある土地でした。

その後、マニラ空港に向かい帰国の途に着き12日に及ぶ比国訪問を終えました。

3. 幾つかの課題：

- 3-1) 2009年からの総数441台の寄贈車椅子の中には、経時変化などで部品の摩耗や故障が生じたり、子供の順調な成長が原因で車椅子のサイズが小さくなり過ぎて、別の大きな車椅子に乗り換える必要が出て来ていることにどのように対応するべきかという問題の解決。

JVR 財団では傘下の施設（孤児院及び CBR 施設など）と連携して正確な台数を把握する必要がありますが、最低で30台前後が、こうしたニーズの対象になると推測されます。

その意識のもとに、今回は、90台の在庫の全数を寄贈対象にせず、敢えて20台を JVR 財団の管理下に残すことに同意しました。30台はあくまでも推定台数だからです。

3-2) 交換後の古い車椅子を再使用可能な状態に戻すためには、比国の何カ所かで修理や調整の出来る技能を習得してもらったり、作業場所の確保や交換のシステムを運営できる体制を作ることが焦眉の急と考えています。

そのことが脳裏にあったので、今回の比国訪問中に JVR 財団の傘下の Kservico 社と Emcor 社の店舗のオートバイ修理部門の責任者に会ったり、同財団の責任者と意見交換したり、現地での清掃・調整・整備という、所謂、新品再生作業の出来そうな候補場所を訪問して来ました。

そして、出来れば、本年度中に 20~40 台を、日本で清掃や調整を施さないままに、フィリピンに送って、日本で行っているそうした作業を現地で実施して、寄贈に供する体制作りを試みることに合意しました。

また、傘下の家電販売小売店 (Kservico 社と Emcor 社の両社) のオートバイ修理技術者によれば、補修部品も作業道具もすべて現地で揃えられること、タイヤ交換が必要な場合には、アメリカ方式の空気入れ方式のタイヤに替えて対処することが可能であることも確認できました。

3-3) 現地での新品再生作業の場所については確保できる目途がつきそうですが、作業場の建屋については、その建築費用について、以下の 2 案が考えられます。

3-3-1) JVR 財団の傘下の会社の工場の余剰地は確保できても建屋の建築費用が必要になります。それについては、今般のマニラ滞在の最終日に訪問した日本大使館からの紹介で、説得性のある理由付けが出来れば、2~3 百万円程度の助成金を受けられるプログラムがあることを知らされましたので、それを申請してみる道があります。

3-3-2) 独自の費用負担に JVR 財団として限度を超える額になるならば、新たな建屋を確保することを回避し、同財団がマニラ市内の別の場所に所有している遊休事務所を改造して使用する方法が代案となることも知りました。

以上の 2 案の検討を、更に、進めて、その解決策を決めて実施することになります。

実は、この種の問題は、既に 1 年以上も前から認識され、その解決策を検討して来ています。

事実、今回の寄贈の対象となった 90 台の中には、日本での当会の月例の整備作業を清掃だけに止め修理調整の作業を省いてフィリピンに船積みされた物が 20 台含まれていたのです。

しかし、それらのすべてが比較的新しく且つ綺麗に使われていたと思われる物ばかりが意識的に選別されて送られたために、マニラに到着の JVR 財団による点検の場で、「殆ど当地で整備作業を引き継いで行う必要がない物」と判断されてしまい、今回の CBR 施設への寄贈に先立って行われた理学療法士による事前の選別の場に披露され、その多くが最初の使用者として理学療法士の念頭にあった肢体不自由児童の使用に供されることに合意され、その対象の 20 台の殆どが、今回の引渡しに含まれて児童に使用されることになりました。

それ故に、当初意図した「現地での新品再生作業の試験的な試み」は実現せず、依然として将来の課題として残ってしまいました。そこで、この課題の解決の第一歩を出来るだけ本年度中に踏み出すことを日比双方の共通目標とすることに合意しました。

3-4) フィリピンへの寄贈を毎年 1 回、80~100 台とスローダウンすることが現実的ですが年間 180 台とするのは、現地の負担が大き過ぎるようなのです。資金的に支障があるのでは

なく、事務処理能力が限界を超えてしまい、傘下の施設の管理下に置かれる車椅子の使用状況と管理状況の把握が蔑ろにされがちになり、且つ、次回の寄贈対象の施設の選別作業の質の低下にも関係して来ていると思われるからです。担当者の人数の問題ではなく、仕事の能率を含めた質の問題があるのです。JVR 財団は別に多くの慈善事業に関わっている事情にも関連しています。

加えて、上記の現地での新品再生の課題の解決が迫っていますので、台数を減らした上で、毎年100台ぐらいの寄贈を継続するのが適当だろうと考えています。

日本で収集される中古の車椅子を、上記のプランに則り、フィリピンの自国で清掃・修理・整備が出来るようになり、作業能率が上がれば、寄贈できる車椅子の台数を増やすことができるでしょう。それが同国の自助の道に合致し、肢体障害児の福祉向上につながるはずです。

3-5) 寄贈先として選定される施設に偏りが起こっていることを是正してもらいます。

上記の JVR 財団の事務処理能力の限界にも関係しているからだと思われませんが、本年の3都市での寄贈では、今回の2都市の寄贈でも世話になった NGO の Norfil 社だけに依存してしまったことに、違和感を覚えました。

確かに、中部地区のセブ島やルソン島の北端などの遠隔地で障害児を世話する施設を新規に発見したり、その実力や活動状況を正しく判断することは、大変に困難なことです。マニラ以外の遠隔地の都市から車椅子の寄贈を要望して来る声は多いのですが、それに対して、逐一、JVR 財団が自ら各地に出掛けて行って、実態を把握して、どの施設に寄贈するかを判断して決定する作業は容易ではありません。そこで、熱心な施設から要望の声が掛かると、判断や決定が安易にそれに影響されてしまうことは仕方がないのかもしれませんが。

確かに、Norfil,Inc.という財団は几帳面で木目の細かい活動をしているのは間違いありませんが、目立って同社にだけ寄贈しているような現象が継続すると、寄贈の機会を与えられない他の施設から不満や苦情が出て来る懸念があります。

一見、それが「選別がフェアでない」として非難を受けるような傾向に陥らないように注意しておくことが大切ではないかと、JVR 財団の責任者に注意喚起させられました。

それに対しては、よく考えて努力してみるとの素直な回答を得ました。そして、当事者の NGO Norfil 社の責任者にもそのことを説明し、「今回は、御社一社の世話になって首尾よく寄贈活動を終えられ感謝していますが、いつも御社だけに寄贈をすることは好ましくない面があるので、今後、別の施設にも寄贈することを理解して欲しい」と述べて、了解してもらいました。

3-6) 熱帯地域に6ヶ月の長期間保管されると30%以上の車椅子のタイヤの空気が抜ける。

今回引き渡された車椅子は日本で昨年12月に梱包され1月初頭に船積み出荷されたものですが、現地での止むを得ない理由から、引渡し予定が数回延期されて、ようやく6月に実施されたのですが、この6ヶ月の時間の経過の間に30%以上の車椅子のタイヤから空気が抜けていることが引渡し式の前の点検で発見されました。そこで全ての車椅子のタイヤに空気をしっかりと注入しましたが、この事実はシッカリと日本側でも知識として認識しておくべきでしょう。

以上